

やはり、あの人だったのですね

佐々木裕子

大阪府・三〇・アルバイト

突然のお手紙、申し訳ありません。以前はよく、あなたに手紙を綴っていましたね。ただ、いつも手渡ししていましたからこんな形は初めてですね。お子さんは、もう三歳になった頃かしら？　ちゃんと父親してますか？　女の子だと風の便りで聞きました。さぞかし可愛がつておられるのでしょうかね。お父さん、お母さん、お兄さんはお元気？　本当によくして頂きました。なのに、あれから一度も連絡しないままです。あの土地で暮らしたこと、普段はなるべく思い出さないようにしています。それでも、こうして認めて^{した}いると、はつきり浮かんできてくるのです。湧き水はどこまでも澄んでいて蛍が川辺を彩っていました。牛達は、のんびり草を食べていました。なだらかな丘に緑が重なるように広がっていました。コスモスが小さく手を振ってくれるようでした。葡萄は瑞々しく甘い水分をたっぷり湛え、黒目勝ちなあなたの瞳のようでした。なのにどうしてでしょう。それら全てが色褪せだしたのは。いつから私は、そこを離れてビルの群れへ戻りたいと願うようになったのでしょうか。狂おしい程に、もう一度、自分を試してみたく

なったのでしょうか。一時の別れのつもりがそれっきりになってしまいました。

やはり、あの人だったのですね

どんなに思ってみても、今ここにある私の日常。あんなにして飛び出したのだからと、歩を進めています。なのに、こうして時々、佇むのです。私のこの手紙、あなたに出さずにそのまま今回も枕の中に眠ることでしょう。時折、こうするんです。何の為に？　後ろを振り返っているようですか？　そうとも言えますが違うようでもあります。前へと運ばせたいのです。ほんの爪先程でも。淡々と続く日常と老いていく私と、あなたの幻影を振り切るために。受け入れるために。

愛しいのかもしれない。未だに。